

コロナ禍のシマフクロウ保護

早矢仕 有子（北海学園大学）

今年、「北海道シマフクロウの会」より活動支援金を頂戴し、2月には盛大な贈呈式も開催していただきました。思い返してみると、あれが私にとってその後の半年間で最後の「大勢の人が集まる場」になってしまいました。3月には立て続けに大学や学会に関わるすべての行事が中止となり、北海道外に出ることも自粛が求められ、その後は市外への出張も困難になりました。そのため、シマフクロウ生息地へも3月末を最後に、6月下旬まで行くことができませんでした。私にとって大切な2か所の生息地では、巣の様子を遠くから監視できるシステムを整備できていたおかげで、繁殖の様子だけは確認できました。幸か不幸かどちらも繁殖に失敗したため、その場にいられないことのストレスは小さくてすみました。シマフクロウも活動を自粛してしまったかのような静かな春でした。

ただ、活動支援金で開催を予定していた、シマフクロウ保護活動の黎明期に関係者から聞き取る集まりは、残念ながら次年度へ延期せざるを得ませんでした。今年度の活動資金としてご援助いただきながら、次年度への繰り越しをお許しいただいたことに改めて感謝申し上げます。

国のシマフクロウ保護事業が始まってから35年余り、これほど年月が経つと開始当初の記憶は薄れがちで、脈々と伝わるべき初期の目標や方向性が途切れてしまう恐れを感じます。シマフクロウの個体数によりやく微増の兆しが認められ、分布域の回復も進みつつある今こそ、「温故知新」が必要な時ではないでしょうか。関係者が一堂に集まり、昔話に花を咲かせ記憶を辿ることで呼び起こされる「大切なこと」があるはずです。この先コロナの勢いが収まり、先輩方のお話を伺える機会を実現できるよう祈るばかりです。

その一方で、コロナ禍が引き起こした社会変化を味方につけるしたたかさがシマフクロウ保護にも求められるかもしれません。

一部のシマフクロウ生息地では近年、営巣地や個体に接近しすぎる写真家や旅行者に悩まされてきましたが、遠出をして直接見に行く観光形態の続行が難しい今こそ、デジタル技術等を導入した「見に行かない見方」を広める好機とも考えられます。生息地を荒らさず、野生個体に負荷を与えず、且つ、シマフクロウと触れ合えた実感に伴い保護への共感を生む見せ方ができないものかと、私はこの7年ほど試行錯誤を繰り返してきました。研究資金、技術、人的資源など己の力不足を感じる要素ばかりで歩みは遅いのですが、方向性自体は間違っていないと確信を深めたこの数か月間でした。インバウンドに浮かれ、勢いに任せて突き進んできた観光業界の野生動物利用に多少なりとも待ったをかけ新たな方向性を提案することができれば、それはこの厄災がもたらすささやかな福音かもしれません。

相手が人であれシマフクロウであれ、直接実地で会わなければ（見なければ）できないこと、逆に会わずに（見に行かずに）すべきことの区別を明確化することも、これからの保護活動に求められる重要な役割のひとつではないでしょうか。